

いまここにない物語

鈴木朝子 — 編集者

『ビーナスブレンド』 麻生哲朗



先週、東急池上線に乗って、ある駅で降りた。初めて降りる駅だった。改札を出るとすぐに小さな商店街があって、その向こうの視界が開けていた。ということは駅のある場所は高台になっていて、駅から少し歩けば見晴らしの良いスポットがたくさんあるのだろうと思った。そうやって好きな感じの場所を訪れると、自分がそこで生活していることを空想する。

たとえば家族も仕事もふりだしに戻してひとりで暮らしていくことになったり、何かの間違い(?)があつて小さな子どもとふたりで新しい町に移ったり……いまのところはあり得ない設定のなかで、自分がその町の商店街を歩いて、少しずつその町の人々に受け容れられていく様子を思い浮かべる。あつたかもしれない過去というか、ないはずの未来というか、とにかく「いまここにない物語」を想像しながらその町を歩いた。

どんな場面設定であっても、家族も仕事もリセットされるというのはふつうネガティブな状況だし、それが空想以上のものでないのは有難いことではある。でも、「いまここにない物語」は、人の心のなかにたくさんあるといいと思っている。とくに、思い迷う場面の多い10代後半の人たちにとって。

いまここにない物語を、自分のなかにどれほど多く持つことができるか。いまここにない物語というのは端的に言えば「逃げ場」のことで、あつたかもしれない過去や、あるかもしれない未来を具体的に描いてみることで、いま居る場所を客観的に眺めることができる。物語と現実を見くらべて、現実のほうがまだマシだとか、どっちもどっちだとか、そんな風に思えばまあいいし、物語の世界のほうがよほど素敵だと思えたら目標ができる。なにより、本のなかに「ちょっと行ってみる」ことのできる町があつて、気持ちを持って行く場所があることで、人はずいぶん気楽になれる。

思い起こすと、本のなかで訪れた「主人公がそれまでのしがらみを捨てて新しい生活を始めた町」のなかで、圧倒的に記憶に残っているのが『ビーナスブレンド』の町だった。

出ていく人間も、訪れる人間も滅多にいない。この街は目指す街ではない。ただ辿り着くだけの街だ。

町はそう表現される。この町にある宿泊所「ホテルビーナス」では、さまざまなかたちで傷いたり大切なものを失ったり居た場所を追われたりした人々が集まって暮らす。人々に名前はなくて、代わりに「呼び名」だけがある。

互いを、どうでもいい名前呼び合うこの習慣は、誰が始めたわけでもない。名前に意味や希望が込められていると、人はそのせいで絶望することがある。この連中はそれをよく知っている。だから僕はカンであり、傍らにいるのはビーナスであり、ワイフ、ソーダ、ポウイなのだ。ガイもサイも本当はどんな呼び方でもいい。代わりはいくらでもある。それくらいの名前の方が、人は名前から自由になれる。

傷を負った人々が、互いの距離感をはかりながら、互いの心のうちを思い遣りながら今日を生き、明日を探す。いまここにない物語のなかの人々は、それぞれの現実を生きる人々に向かって、限りなく優しい。●